

# 派遣研究員

氏 名	蔣 明超
所 属	歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
派遣期間	2018年10月10日～2018年10月26日
派遣先	北京師範大学文学院 民間文学研究所
研究課題	文字資料から石造物になった「石敢當」



## 文字資料から石造物へと変化した「石敢當」

蔣 明超

### はじめに

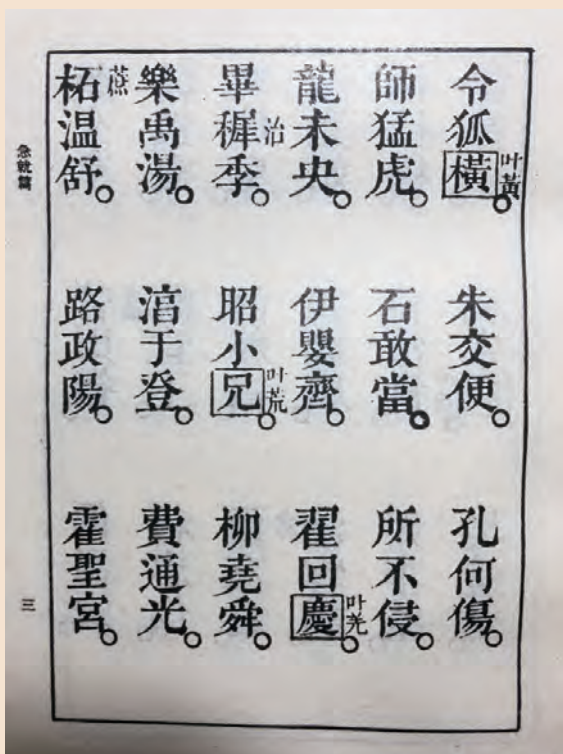
「石敢當」というと、普通に道路の突き当たりなどに設置される魔除けや厄除けのための石造物を思い出す。史料の中で記録した最古の石造物の石敢當は宋代の学者王象之が撰した『輿地紀勝』に記載がある唐大暦5年

(770年)、福建莆田県県庁にあったものである。中国に現存する最古の石造物の石敢當は、福建省福州市于山にある、南宋時代紹興年間(1131～1149年)のものである。それ以前の石敢當石碑の記録がないため、「石敢當」という石造物は唐代中後期に福建の地で出現したと考えられている。

しかし、最初の「石敢當」はもともと石造物ではなかった。それより800年くらい前の紀元前40年頃、前漢時代の史游が撰した『急就篇』に、「石敢當」という文言が初めて登場した(図1)。「急就篇」は初心者向けの識字用の本である。内容は日常生活でよく使う文字を姓氏名字、器具服装や文学法理三つの部分に分けて表現している。「石敢當」は姓氏名字の節にある人の名前である。石敢當は実在していた人物かどうかは確認できない。

したがって、果たして『急就篇』にある「石敢當」の文言と唐代中後期に出現した石造物の「石敢當」とはどのような関係であるか。もともと文字資料であった「石敢當」は、なぜ唐代中後期になって石造物に変化したのか。そして、なぜ都の長安及びその周辺地域ではなく、遠く離れている福建地域で初めて出現したのか。そのような疑問を払拭すべく、文字資料の「石敢當」から石造物の「石敢當」になった経緯を論じたい。

北京師範大学文学院は漢字、漢語、古代文学研究で有名であり、特に神話、民間故事など民俗学研究的の盛んな研究機関として知られている。筆者は2018年10月10日から10月26日まで、非文字資料研究センターの派遣研究員として、民俗学研究資料の宝庫である北京師範大学文学院民間文学研究所を訪問し、多くの石敢當資料



●図1 『急就篇』にある文字資料の石敢當



を入手した。

## I 中国の書籍に登場する石敢當

『中国禁忌風俗』では泰山石敢當を、張天師符、鐘馗、姜太公在此、門神と共に、禁忌厭勝<sup>1)</sup>の方法として説明している<sup>2)</sup>(図2)。『急就篇』に「石敢當」の文字が初めて登場し、後に「石敢當」の前に「泰山」を加えるようになったと記したが、この「石敢當」は明らかに石造物で、『急就篇』にある「石敢當」の文字とは同じものではない。『古代建築』の「道教建築芸術特徴」の節に、特色ある辟邪物品の例として、石敢當と照妖鏡<sup>3)</sup>を挙げている<sup>4)</sup>。石敢當の由来には言及していないが、道教建築のため、石敢當が道教と緊密な関わりを持つことは推測できる。そして、道教建築だけではなく、道教の神仙鬼怪思想はほかの古建築にも大きな影響を与えたと指摘している。中国に現存する最古の石造物の石敢當の碑文には「奉仏弟子林進暉」との一文があり、石敢當と仏教との関係も考えられる。

『泉州習俗』の「建房儀礼」の節に、二つの石敢當説が書かれている<sup>5)</sup>。一つ目の石敢當は魔除けの力を持つ山東泰山出身者によってつくられたものである。時が経って、遠くまでその名が知れ渡り、彼に魔除けの願掛けをする人もどんどん増えてきた。彼はその都度各地をまわることには出来ないで、石碑に「石敢當」を刻し、突き当たりに設置して魔除けをするよう人々に広めた。この説は泰山地域の泰山石敢當の民間故事とほぼ同じで、泰山石敢當を一般的な石敢當と混同した結果であろう。二つ目の石敢當は魔除け、辟邪用の力強い神様である。興味深いことに、同説明図には、石敢當と石獅子があった(図3)。石敢當が神様だとしても、人間だとしても、さすがに石獅子とは関係がないと思われる。ところが、筆者の福建省泉州市での聞き取り調査によると、現地住民は突き当たりにあるペアではなく、一基だけの石獅子を「石敢當」と呼んでいるのも事実である。

ほかには、『閩台民俗散論』の清代の福州人王廷俊の『樵隱筆記』に、「石敢當は古代勇士の名前で、山東泰安人である。泰安は泰山地域にあるから、よく「石敢當」の前に「泰山」を加える」と記した<sup>6)</sup>。総じてみると、福建地域の石敢當説は、その起源を泰山地域出身の人に追究する場合が多く、一般的な石敢當を泰山石敢當と混同し、泰山石敢當の民間故事を受け入れた結果と解釈できる。

このような状況は泰山地域でも同じようである。『泰山文化概論』の「泰山石敢當」節では、史料と民間伝説に分けて、その由来を説明している<sup>7)</sup>。史料とは『急就篇』にある「石敢當」の文字と、『姓源珠璣』にある「石敢當」という五代勇士説のことである。これらは完



●図2 『中国禁忌風俗』にある泰山石敢當の説明と張天師符、鐘馗、姜太公在此



●図3 『泉州習俗』の石敢當説明図にある石敢當と石獅子

全に一般的な石敢當の由來說であり、泰山地域、もちろん泰山石敢當とも関係がない。民間伝説の特徴は「石敢當」が全て「泰山」と繋がる点にある。泰山地域の石敢當という人間に関する説が多数あり、泰山石に関する説もある。『泰山文化研究』には、泰山石敢當の由來說が三種類にまとめられている<sup>8)</sup>。第一種類は「石敢當」の文字、つまり「石の当たるところ敵なし」の意味である。第二種類は「石敢當」を古代勇士にする説である。第三種類は靈石の持つ力に由来する。これらは全て泰山とは関係がない。泰山石敢當は石敢當の後に出現したもので、本稿では一般的な石敢當に絞ることにする。

## II 石造物の石敢當と『急就篇』にある「石敢當」文言の関係

前述のように、石造物の石敢當は魔除け、辟邪の物品として認識されている。史料にある最古の石造物の石敢當の碑文には「石敢當 鎮百鬼」とあり、つまりその役割は最初から変わっていない。現代では石敢當を古代人と捉えるのが主流であるが、問題は石造物の石敢當が唐代に初めて誕生した時点で、人間設定があるかどうかということである。「石敢當 鎮百鬼」の字からみると、







●図4 北京故宮の一角にある巨石

「石敢當」を人間に置き換えても全く問題はない。だが、中国に現存する最古の石造物の石敢當の碑文には「求資考妣生天界」とあり、つまり死んだ母が天界で先に死んだ父と再会できるようにこの石敢當を設置した、ということである。こう考えると、たとえ人間であっても、仏弟子の祈願対象になれる、と捉えることができる。しかもほかに魔除けの力を持つ石敢當は、恐らく当時（宋紹興年間）の人々によく知られていた神様だったのであろう。残念ながら、『急就篇』にある「石敢當」の文言のほかは、それ以前の記録に何も残っていなかった。したがって、最初の石敢當は人間や神様ではなかったに違いないと筆者は考えている。こうなると、『急就篇』にある「石敢當」が実在した人物であるかどうかを論述する必要もなくなった。

果たして石造物の石敢當と『急就篇』にある「石敢當」の文言には一切関係がないのであろうか。筆者はそう思わない。石造物の「石敢當」が出現する前に、既に石を使って魔除け、辟邪する風習はあった。『泰山文化研究』には、前漢淮南王劉安（紀元前2世紀頃）の『淮南子』に「丸石于宅四隅，則鬼能無殃也（石を住宅の四隅に埋めると、魔除けになる）」との記述があると先に述べた<sup>9)</sup>。北京故宮の四隅にも四つの巨大な石が設置されている（図4）。石は地上まで現れているが、役割は同じである。唐大暦5年の石敢當も土に埋めてあったが、違うところは石に「石敢當」の文字があ

ることである。つまり石造物の石敢當の誕生は、石の実物と「石敢當」の文字とが融合した結果である。『急就篇』は識字用のテキストで、知識人が必ず使う本である。ただ、その時は識字の段階にとどまり、「石敢當」の文字の意味をわかる人は少なかったと思う。唐代の顔師古の注解により、「石敢當」の文言の意味も多くの人々に知られた。『急就篇』には「石敢當」の文言がなければ、石造物の「石敢當」の誕生もなかったかもしれない。

## おわりに

石信仰は人類史における最古の信仰の一つである。漢字は象形文字であるから、「石」という字も石の実物からきたものである。春秋戦国時代には「石」を人の姓に用いるようになった。唐代顔師古の『急就篇注』に、「衛國に石錯、石賈、石悪という人名があり、鄭國の石癸、石楚、石制など皆石氏であり、周國に石速がいた、齊國に石紛如がいた。その人たちは全部後世の人々に「石」の姓を名乗らせた<sup>10)</sup>とある。前漢時代にはすでに住宅の四隅に石を埋めて魔除けをする道教的な習俗があった。史游の『急就篇』にも、石の姓を「石敢當」で表現している。その後、仏教と道教にも多くの石信仰が受け入れられ、その代表的なものとして、魏晉南北朝の石窟寺院（敦煌莫高窟、大同雲岡石窟、洛陽龍門石窟など）造営運動が挙げられる。唐代になると、道教の国教の地位が確立され、道教と仏教が同時に繁栄する時期を迎えた。同じ時期、「石敢當」の文言も顔師古の注解により、その意味を唐代の知識人たちに広く知らしめた。唐代中後期、仏教と道教はシャーマニズムの影響を受け、鬼神信仰が盛んになっていった。そういう時代には、「石の当たるところ敵なし」の意味を持つ「石敢當」の文字も呪力を生じ、もともと魔除けなどの力を持つ石の実物と完璧に融合し、シャーマニズムが盛んで、安史の乱にも巻き込まれなかった福建の地で、石造物の石敢當が誕生した。つまり、『急就篇』にある「石敢當」の文字はただの人名の説明に過ぎず、石造物の石敢當と直接関係はない。だが、『急就篇』がなければ、顔師古の「石敢當」注解もなく、石造物の石敢當も出てこなかったかもしれない。

最後に、本レポートを書き上げることができたのは、非文字資料研究センターの方々と北京の万建中先生、楊利慧先生、葉涛先生及び張多さん、高志明さんなど師友のご協力のおかげである。ここに記して感謝の気持ちを申し上げたい。

## 【注】

1) まじないによって、タブーな人やモノを抑えて鎮める術で



ある。

- 2) 任聘著『中国禁忌風俗』 pp.189-194
- 3) 中国民間の建屋儀礼で、民居の門の上部の真ん中に置く鏡である。こう設置すると、もともと見えない妖魔鬼怪の正体を照らし出せると言われる。
- 4) 唐曉軍 師彦靈著『古代建築』 pp.113-114
- 5) 陳垂成著『泉州習俗』 p.58
- 6) 趙麟斌著『閩台民俗散論』 p.99
- 7) 陳偉軍『泰山文化概論』 pp.89-92
- 8) 蔣鉄生著『泰山文化研究』 p.193
- 9) 注8) 蔣、前掲書 p.194
- 10) 史游著『急就篇』にある、顏師古の「石敢當」註解【衛有石錯石賈石惡，鄭有石癸石楚石制，皆為石氏，周有石

速，齋有石之紛如，其後以命族】 p.51

#### 【参考文献】

- 陳垂成 2004 『泉州習俗』福建人民出版社  
蔣鉄生 2011 『泰山文化研究』吉林大学出版社  
任聘 2013 『中国禁忌風俗』河南文芸出版社  
史游（前漢）1989 『急就篇』岳麓書社  
唐曉軍 師彦靈 2004 『古代建築』敦煌文芸出版社  
葉濤 2007 『泰山石敢當』浙江人民出版社  
趙麟斌 2006 『閩台民俗散論』海洋出版社  
陳偉軍 2012 『泰山文化概論』山東人民出版社

## 从文字资料变成石碑的“石敢当”

历史民俗资料学研究科 博士后期课程 蔣 明超

### 研究动机

一提到石敢当，很多人都会习惯性的想起设置在路冲等地方用以驱鬼辟邪的刻有“石敢当”文字的石碑。有史料可查的最老的石敢当石碑是宋代学者王象之所著的《舆地纪胜》里记载的在旧福建莆田县县衙发现的载有唐大曆五年，也就是公元770年的东西。中国现存最早的石敢当石碑是曾经在名叫“九仙观”的道观中，现在立于福建省福州市于山碑廊之中的刻有南宋绍兴年间，也就是1131年到1149年间设立的东西。因为除了以上所述的两个石敢当外，之前的时间里再也没有关于石敢当石碑的记载，所以普遍认为石敢当石碑是唐代中后期在福建地区出现的。

但是，最初的“石敢当”并不是以石碑形式出现的。在唐大曆五年的石敢当石碑之前大约八百年前，也就是公元前四十年左右西汉的黄门令史游所著的《急就篇》里，“石敢当”最初以文字的形式登场（图1）。所谓《急就篇》，只是面向初学者的识文断字用的类似教科书的东西。书中把日常生活中比较常见的文字分成姓氏名字、器服百物和文学法理三个部分来呈现。“石敢当”即是出现在姓氏名字章节中的人名，但是真实历史中是否确实存在石敢当其人，从现在的资料来看还无法断定。

所以，到底《急就篇》里的“石敢当”文字和唐代中后期出现的“石敢当”石碑是否一定存在关系？原本只是以文字形式出现的“石敢当”为什么会在八百年后的唐代中后期以石碑的形式出现？而且为什么不是在唐都长安及其周边，而是在相隔遥远的福建地区出现？带着这些疑问，本文将对从文字资料变成石碑的“石敢当”进行论述。

北京师范大学以汉字、汉语以及古代文学研究，尤其以

神话和民间故事等民俗学研究有名。所以笔者在2018年10月10日到26日作为非文字资料研究中心的派遣研究员对中国民俗学研究圣地北京师范大学文学院民间文学研究所进行了访问，并查到了很多宝贵的资料。

### 中国书籍中的石敢当

在《中国禁忌风俗》一书中，泰山石敢当是和门神、姜太公在此、钟馗以及张天师符一起作为禁忌禳解的方式来介绍的<sup>1)</sup>（图2）。书中也写到“石敢当”文字最早是在《急就篇》中出现，之后习惯性的经常在“石敢当”之前加上“泰山”二字。但是很显然“泰山石敢当”的“石敢当”很明显是石碑，和《急就篇》中的“石敢当”文字显然不是一样的。在《古代建筑》一书的道教建筑艺术特征的章节里，石敢当是和照妖镜一起作为特色的辟邪物品的例子来介绍的<sup>2)</sup>。文中虽然没有言及石敢当的由来，但是可以推测出石敢当与道教的紧密联系。书中还指出道教的神仙鬼怪思想对道教建筑以外的古建筑也有很大影响。从于山碑廊石敢当的“奉佛弟子林进晖”碑文中也可推测出石敢当与佛教的紧密关系。

《泉州习俗》的建房礼仪章节中记述了两个石敢当由来<sup>3)</sup>。第一个把石敢当归结为出生在山东泰山地区的善捉妖邪的神人。因为从各地而来的请石敢当捉妖的人太多，根本应付不过来。遂想出一法子，于石碑上刻上其名放于路冲等处。这一说法跟流传在山东地区的泰山石敢当的民间故事大致相同，笔者认为可能是石敢当和泰山石敢当的混淆。第二个只有一句话，就说石敢当是古代专司抓鬼的大力神。但是笔者比较感兴趣的是此处所附照片是一个石敢当石碑和一尊石狮子（图3）。因为不论石敢当是神也





好，是人也好，肯定不会和石狮子有任何关系。但是据笔者之前在福建泉州做石敢当调查时的询问结果，当地居民确实把在路冲地方设置的没有石敢当文字的石狮子称作“石敢当”。这里说的并不是通常放在门前的成对的石狮子，而是设置在路冲的只有一尊的石狮子。

除此之外，《闽台民俗散论》里引用清代福州人王廷俊的《樵隐笔记》，说石敢当是古代勇士的名字，为山东泰安人。因泰安即在泰山地区，故常在“石敢当”之前加上“泰山”二字<sup>4)</sup>。总的来说，现在福建地区把石敢当追究为山东泰山地区出身之人的说法非常多。这可能是石敢当和泰山石敢当被混淆，福建地区也吸收了泰山石敢当的民间故事的缘故。

在泰山地区也同样存在石敢当和泰山石敢当相互混淆的状况。《泰山文化概论》的泰山石敢当章节中分为史料记载和民间传说对其由来进行了说明<sup>5)</sup>。史料记载主要有追究于《急就篇》中的“石敢当”一说和五代十国时代的名为“石敢当”或“石敢”的勇士一说。这些都是关于石敢当的由来，和泰山地区以及泰山石敢当没有关系。而民间传说的特征是，这些石敢当都与泰山紧密相关。把石敢当当做泰山地区出身的人的说法最多，将其追究为泰山石的说法也有。《泰山文化研究》里把泰山石敢当的由来归结为了三类<sup>6)</sup>。第一类是将其由来归结为“石敢当”文字的“石头所当之处无敌”的意思。第二类是将石敢当归结为古代勇士的说法。第三类是将石敢当的由来归结为古代灵石崇拜的遗俗。而很明显可以看出这些也和泰山没有多大关系。因为泰山石敢当是石敢当之后才出现的，这里就先将其一放，集中在石敢当上展开论述。

### 石敢当石碑和《急就篇》中的“石敢当”文字的关系

就像前面所述，石敢当石碑是作为降妖伏魔、辟邪禳解的物品被认知的。唐大历五年的石敢当石碑的碑文中有“石敢当，镇百鬼”，也就是说其驱鬼的功能自最初就没改变。现代社会主流上是把石敢当归结为古代的人，但笔者好奇的是，是否在唐代中后期石敢当以石碑的形式的时候，其便自带人物设定。从“石敢当，镇百鬼”来看显然是可以的，那么接下来就拿中国现存最老的绍兴年间的石敢当石碑来看看。这块石碑上刻有“求资考妣生天界”，也就是说林姓的佛家弟子是为了刚去世的母亲能够在天界跟先逝的父亲再会而设的此石敢当。这样再一考虑的话，即便是有人物性格，那么既能作为佛家弟子的祝愿对象，又具备驱鬼功能的石敢当肯定在绍兴年间便是家喻户晓的大神了吧。但是遗憾的是，除了《急就篇》中的“石敢当”以外，之前再也没有记载了。所以笔者推测最初以石碑形式出现的石敢当应该不是某个人或某尊大神，也就是说其当时没有人物性格。如果是这样的话，再追究《急就篇》中的“石敢当”是否为真实存在之人也就没有意义了。因为两者之间已经没有直接关系了。

但是真的石敢当石碑就和《急就篇》中的“石敢当”一点关系都没有吗？笔者不这么认为。其实在石敢当石碑出现以前便已经有用石头来驱鬼辟邪的风俗。《泰山文化研究》里引西汉淮南王刘安的《淮南方术》曰“丸石于宅四隅，则鬼能无殃也。”<sup>7)</sup>现在在北京故宫的四角也可以看到四块巨石（图4）。虽然不是埋于地下，但其作用是相同的。据史料记载，唐大历五年的石敢当也是埋于地下，不同的是其碑面上有了“石敢当”的文字。也就是说，石敢当石碑是石头的实物和“石敢当”文字相融合的产物。《急就篇》是当时识文断字的教科书，应该大部分知识分子都知晓，只不过知道“石敢当”文字意思的人或许不多。通过唐代文人颜师古的注解，“石敢当”文字的意思也被大部分人所熟知。但即便是颜师古所起的作用再大，没有《急就篇》也就没有其注解。

### 总结

灵石信仰是人类历史上最古老的信仰之一。而汉字属于象形文字，也就是说“石”字也是由石头的实物演变来的。根据颜师古的“石敢当”注解，春秋战国时代已经有很多人以“石”为姓<sup>8)</sup>。西汉时代已经有将石埋宅四隅驱鬼辟邪的习俗。同时代的史游也在《急就篇》的姓氏名字章节里写进了常被使用的“石”姓，并用“石敢当”来表现。之后，道教、佛教都吸收了大量石信仰的东西进来，比较著名的是魏晋南北朝的石窟寺院（敦煌莫高窟、云冈石窟、龙门石窟等）制造运动。到了唐代以后，道教被确立为国教，形成佛道同时繁荣的景象。也是在这一时期，通过颜师古的《急就篇》注解，石敢当的意思被广大知识分子所熟知。唐代中后期佛教、道教受巫俗影响巨大，鬼神信仰盛行。正是在这样的时代背景下，有“石头所当之处无敌”意思的“石敢当”文字也产生了魔力，并与原本便有驱鬼辟邪功能的石头的实物完美结合，在巫俗盛行且受安史之乱影响较小的福建地区诞生了石碑形式的石敢当。也就是说，《急就篇》中的“石敢当”和“石敢当”石碑的出现并无直接关系，但是，如果没有《急就篇》，也就没有颜师古的“石敢当”注解，也许就不会有石敢当石碑的出现。

最后要特别感谢给予我多方协力的非文字资料中心的各位和北京方面的万建中老师、杨利慧老师、叶涛老师以及好友张多博士和高志明博士。

### 注

- 1) 详见任聘『中国禁忌风俗』pp. 189-194
- 2) 详见唐晓军 师彦灵『古代建筑』pp. 113-114
- 3) 详见陈垂成『泉州习俗』p. 58
- 4) 详见赵麟斌『闽台民俗散论』p. 99
- 5) 详见陈伟军『泰山文化概论』pp. 89-92
- 6) 详见蒋铁生『泰山文化研究』p. 193
- 7) 同6) p. 194



8) 史游著『急就篇』里的颜师古的「石敢當」注解【衛有石錯石賈石惡，鄭有石癸石楚石制，皆為石氏，周有石速，齋有石之紛如，其後以命族】 p. 51

#### 参考文献

陈垂成 2004 『泉州习俗』福建人民出版社

蒋铁生 2011 『泰山文化研究』吉林大学出版者

任聘 2013 『中国禁忌风俗』河南文艺出版社

史游（西汉） 1989 『急就篇』岳麓书社

唐晓军 师彦灵 2004 『古代建筑』敦煌文艺出版社

叶涛 2007 『泰山石敢当』浙江人民出版社

赵麟斌 2006 『闽台民俗散论』海洋出版社

陈伟军 2012 『泰山文化概论』山东人民出版社

